

第 10 講 ミケーネの国家と社会 ―ピュロスの場合―

遺跡と遺物

ピュロスの位置：ペロポネソス半島西南端

南イタリアやアドリア海への海上交易の重要拠点

湿地帯が多く、亜麻の産地

宮殿はアヤ・エングリアノスに

湾を望む小高い丘の上に 3 つの建物群

中央の建物群の奥に、玉座の間

円形の巨大な炉・・・宗教儀礼と関連

玉座の間の後ろに数多くの壺などを収めた部屋

左右に女性部屋があり、大きなバスタブが出土・・・おそらく宗教
儀礼と関連

宮殿の下側に町が広がる

ソロス墓・・・世襲的に使用

豪華な副葬品

王朝の存在をうかがわせる

黄金製のカップなど・・・威信財として重要

階級社会・身分制社会を維持するには威信財の調達と蓄積、誇
示が必要

権威の象徴としての機能

エジプトなどから黄金を調達・・・オリエント世界と活発な交
流

近くに宮殿の存在

宮殿の復元図

天井には極彩色の幾何学模様

壁面には壁画が施される（ライオン・グリフィン・猟犬・豎琴を弾く
女性・戦いの場面など）

建物群と建物群の間には中庭

粘土板と文字による記録

線文字 B・・・ヴェントリスとチャドウィックによる解読
官僚制の存在が想定された

考古学者や歴史家のオリエント・モデル

「～であるはずだ」、「～でなければならない」・・・研究者の時代性
を反映

理論的背景

マルクスの階級論

ウェーバーの社会学の類型的発展図式

個の欠如・・・集団・共同体への個の埋没

私有地の欠如と共同地

アジア型の大家族

その上に官僚制によって支えられる専制王権

ミケーネ社会を先古典古代社会と位置づけ、古代オリエントの都市
国家との類似性

を求める

粘土板の解読と解釈

ヴェントリスとチャドウィック

文書行政の存在

古代オリエントの都市国家と比較・・・異質性のみならず同質性を
も求める

オリエントとの類似性を証明したことにはならない←出発点から
類似性を前提に

1. ミケーネ社会のモデル

1) 古典学説：アジア型の官僚制を伴う専制国家

ヴェントリスとチャドウィック

H. D. チャドウィック、『ミュケーナイ社会』、安村典子訳
(みすず書房、1983年)

ミケーネ社会や国家をシュメールやウガリトなどの西南アジアの都市国家やヒッタイトの兵士の所有地を巡る封建的諸関係と比較。コトナ・ケケメナと呼ばれるダモス所有地の個人への貸与や付帯する義務（カマ）、ワナカ（王）を支える宮殿の役人、エクェタを封建臣下と比較することでミケーネ社会と国家体制の特徴を炙り出していこうとする研究視点。

太田秀通

太田秀通、『ミケーネ社会崩壊期の研究』（岩波書店、1962年）
マルクス主義歴史観によるミケーネ社会と国家理解。
特に戦後に発見紹介されたマルクスの草稿『資本制生産に先行する諸形態』が指導動機となった。
ポリス社会に先行するミケーネ社会はより原始的な形態を留めたアジア型の社会でなければならないという理解。
ウェーバーの翻訳が出たばかりの論文『古代農業事情』の序説に展開されている国家モデル「官僚制を伴う都市王制」を援用。
宮殿に居るワナクスと呼ばれる専制的な王が、エクェタ、クァシレウからコレテ、ポロコレテ、ダモコロに至る階層的な官僚を通じてダモと呼ばれる農村を支配。
広大は王領地と並んで農村共同体の所有地が存在しており、私有地所有に依拠する古典古代型の市民階層は未だ現われておらず、個人は共同体的諸関係の中に埋没していた。
家族形態はアジア型の大家族と古典古代型の小家族の中間的形態をとっていて、拡大家族の形態がミケーネ社会を特徴付けていた。
このようなモデルの背景にはマルクス主義による発展段階的なミケーネ社会の位置付けと理解があった。